



長崎県長崎市
中新町

地域の未来と アントレプレナーシップ

The Future of Communities
& Entrepreneurship

教育業界でも注目されるアントレプレナーシップ(起業家精神)。この連載では、全国さまざまな地域の未来に向けて取り組むアントレプレナーの方々取材し、何かを変える一歩目の踏み出し方、高校教育にも通じるアントレプレナーの視点を探ります。

第2回：斜面地は“資源”。長崎の景観を生かしたまちづくりを



なぜ長崎の商店街では
人が行き交っていたのか

「早くこの小さなまちを出て、にぎやかな都会に行きたい」都会への憧れを携えて、大学進学とともに県外に移り住んだ私の前に現れた景色——それは、人のない寂れた商店街でした。

長崎県長崎市に生まれ、子どものころの遊び場といえば近所の商店街。三輪車で商店街をめぐり、スナックに顔を出すのが日課で、そんな私に地域の人たちが温かく声をかけてくれました。

しかし、ないものねだりで長崎より栄えているまちに憧れて、関西にある地方大学に進学。友人と一緒に中心地の商店街を訪れて、衝撃を受けました。私と友人の二人以外に、人の姿が見えないのです。郊外に大きなショッピングモールができ、車移動が中心となり、商店街がどんどん衰退していく。全国の地方都市で同じようなことが起きていました。

ただ、私の育った長崎の商店街では、人がたくさん行き交っていた。なぜだろう。そのヒントは、起伏に富んだ地形を有する長崎の景観にありました。作家の

長崎都市・景観研究所／
null 所長
平山広孝さん

1985年、長崎市生まれ。高校生まで平地のまちなかと斜面地を行き来する日々を過ごす。和歌山大学システム工学部デザイン情報学科卒、九州大学大学院芸術工学府デザインストラテジー専攻修了。コンパクトシティとして長崎市がもつ価値に気づき、2010年に長崎都市・景観研究所／nullを設立。



永井荷風は長崎を「円形劇場」と表現しましたが、長崎市街地はすり鉢状の地形をしており、長崎港を中心とした商店のあるエリアが「舞台」、斜面に連なる住宅街が「観客席」のようになっています。つまり平地の面積が限られているので、商店のあるエリアがぎゅつと密集して、他に広がらなかったのです。

狭いからこそ、住む人はまちを歩いて回ることになります。車移動と違い、歩くことで人と人との会話が生まれる。さらに、その狭い地域に歴史や異国の文化が詰まっている。この構造に気づいたとき、生まれ故郷を見る目が変わりました。コンパクトだからこそ、長崎は面白い。このまちに自分も関わりたいと思うようになったのです。

大学院に通いながら、長崎都市・景観研究所／nuuを設立。長崎のまちづくりについて友人と研究を始め、まちを歩き、気づいたことをブログやライブ動画で発信するようになりました。

「がっかり」の先で得た気づき

まちを歩き回るなかで、特に面白いと感じたのが「斜面地」でした。長崎といえば坂が多いまちとして有名ですが、車が通れない道もあるなど住むには不便が多く、人口減が進んで、空き地や空き家も増えていました。課題が多いものの、その分、可能性も大きいのではないかと。この斜面地を資源ととらえて、若者たちのアクティビティの場として使用できれば、土地の所有者にとっても草刈りなどの

管理コストを削減することにつながるのでは。そう考え、斜面地を農園として活用する、坂と農園で「さかのうえん」のアイデアを思いつきました。2010年に「長崎市若者のまちづくり施策提案制度」を使って研究に取り組み、長崎市長にプレゼンテーションすることに。ところがアイデアは高評価だったものの、実現には至りませんでした。正直「いいアイデアなら、なぜやってくれないのだろう」とがっかりする気持ちがありました。

それでも、まちづくりに携わりたい。その思いで、大学院修了後、長崎市役所に勤めることにしました。予算と権限をもつ公務員だからこそ、まちに対してできることがあると思ったからです。

しかし、がっかりは続きます。「まちづくりがやりたいです」と言って入庁したのに、配属されたのは土木の部署だったのです。ただ、任された仕事をひとまず一生懸命やってみると、少しずつ自分の考えが変わっていききました。一見まちづくりに関係ないように見える仕事も、実はまちのデザインや人の暮らしと密接につながっていて面白い。また、市民ワークショップを開催する機会があり、ここでもちに関わるさまざまな市民の立場や思いを知ったことが、自分の視野を広げるきっかけになりました。

次第に私は「いいと思うから、やりたい」だけでは事にはなせない、ということに気づいていきます。私たちは一人では生きられず、他者との関係のなかで生きている。人にはそれぞれ立場があり、事が動かな



1



2

1 長崎市独特の斜面を生かした「さかのうえん」。坂の上という立地柄、農園からは長崎港や市街地が見渡せる。教育活動にも活用されており、隣接する地域の高校や大学と連携し、授業や部活で使用されることもある。

2 長崎居留地エリアには魅力的なコンテンツがたくさんあるが、情報発信不足が課題だった。そこでネオ観光案内所「HUBs Ishibashi」をオープンし、観光案内に加え、セルフ喫茶やイベント開催などを展開。

いときには、それなりの理由がある。何かをしたいと思うのなら、関わるさまたまな人たちの立場を理解しつつ「私からは、その人たちに對して何をプレゼントできるだろう」と考えていかなければ。そう思うようになっていったのです。

そのうちにまちづくりの部署に異動になり、平日は市役所の職員として、休日はnuriの所長として、まちづくりに携わることになりました。

場や出会い、交流、体験：プレゼントを見つけて渡して

2010年にプレゼンテーションして実現しなかった「さかのうえん」の企画は、意外な形で実現しました。2020年、知人が密集斜面市街地である中新町に移住したことで、自治会の方々との関係が深くなったのです。自治会長に「こんなアイデアがあったんですよ」と話したところ、中新町の空き地で「さかのうえん」を実現できることになりました。

荒れ果てた空き地に若者など幅広い年齢層の人が訪れ、人の手が入った畑に戻していく。次第に「この土地も『さかのうえん』に使ってもらえないか」と依頼を頂くようになり、中新町内に4カ所のさかのうえんを開くことに。現在は5カ所目のオープンに向けて準備中です（2025年2月取材時）。

さかのうえんを始めるときは、近隣に住む方のお宅に必ず挨拶に行きます。地域に育ててもらったような人間ですから、じいちゃん、ばあちゃんたちとの会話が

好き。時には、さかのうえんで収穫した作物を差し上げることもあります。先日「もたくさん採れた芋を「良かったら持っていつてください」と置いておいたところ、あつという間になくなっていました。近隣に住む方々や自治会の協力なくては、さかのうえんはできません。作物をお分けするの、関わってくださる方々に少しでもプレゼントを渡したい、という思いからです。

プレゼントとは、ものには限りませんが、例えば高齢者にとつて草刈りは「負担」ですが、体を動かしたい若者たちにとつては「レクリエーション」というプレゼントになります。普段出会わない人との交流、新しい経験、知らなかった絶景との出会い。見方を変えれば、プレゼントになりうるものは、世にあふれています。地域の人たちが喜んでくれることを考え、そうした機会や場を積極的につくっていくことも、まちづくりを進めるためには欠かせないのではと私は考えています。

現在はさかのうえんに加えて、人と地域の架け橋となる、関係、案内所としてのネオ観光案内所「HUBs Ishibashi」や、繁華街の空きスナックを再生した「まちづくりスナック・ニューシグナル」など、さまざまなプロジェクトに取り組んでいます。かつて「小さなまち」の魅力が感じられずに飛び出した私ですが、今はこの「小さなまち」だからこそ可能性をたくさん感じています。一人ではできないことを、みんなと。これからも、このまちを楽しみ尽くしていきたいです。



地域の未来につながる アントレプレナーの視点

視点

1

生まれ育ったまちの外に一度出たことで、地方都市における商店街の衰退を実感。「では、なぜ長崎では商店街が賑わっていたのか」と問いが生まれ、地形などの景観とまちにおける人の流れが密接に関係していることに気づく。

視点

2

市役所職員として働くことで、まちに関わる多様な人たちの立場や考えを知る。行動を起こす際に、関わる人たちの立場を理解しつつ、その人たちにとって「プレゼント」となるものや体験、場をつくろうと心がけるようになった。